

**漢字文化圏古医籍の定量的比較研究**  
—各国伝統医学が共有可能な歴史観の確立—

研究代表者 茨城大学大学院人文科学研究科 教授 真柳誠

共同研究者 中国中医科学院中国医史文献研究所 教授 肖永芝

## 1 研究目的

伝統医学とりわけ漢字文化圏のそれに顕著な特徴として、主に書物を介して知識を伝承し、伝統と体系を形成してきた側面がある。それら過去の書物は古医籍として現存し、また過去の蔵書目録等で存在したことを知る書物もある。一方、書物は容易に国境を越えて流通し、複製される。このため中国を主とした漢字文化圏の医書は、およそ1500年以上にわたり周縁国にも影響を及ぼしてきた。当背景があり、中国・日本・朝鮮半島・ベトナムでは同系の伝統医療が行われている。しかし個々には使用生薬や論理構築の相違をはじめ、相互で理解が異なる概念や用語も派生しており、別々の体系ともいえる。

他方、東アジアの各国は現在急速に高齢化が進行し、高齢者の保健と医療に対する伝統医学の役割が市民サイドでも行政サイドでも重視されつつある。その要因もあって日・中・韓の研究協力が提唱され、少なからぬ試みがなされてきた。しかしWHO主導による経穴(ツボ)部位の国際統一[1]以外、まだ大きな成果は得られていない。これまでの研究協力が多く形だけに終わってしまうのは、各国の伝統と独自性が形成された歴史の客観的認識が相互にないため、他国の研究意義と論理も相互に理解されないことが最大の要因と考えられる。当問題は解決されねばならない。

むろん日中・日韓・中韓・中越の医学を比較する研究は従来も各国で行われてきた。しかし2国間の相対論ゆえ客観性が担保されず、多くは自国中心の優劣論に陥っている。国際会議でも双方が自己の伝統や体系を誇るだけのどうどう巡りで、歴史認識の共有は不可能な状態にある。さらに東アジア伝統医学の比較研究は極端に少ない。この少ない研究の大多数が、代表的著述や学説という「定性」の比較分析から、相互の特徴を掌握しようとしてきたことに原因があるのではなからうか。

ところで日本・韓国・ベトナムの伝統医学が、中国医学の強い影響下で形成されてきたことは紛れもない史実である。また研究代表者はこれまで古医籍書誌の調査データから、各国の医学は地理と社会文化等を背景に一部の相違を生じながらも、実は多くの歴史を共有するらしい興味深い現象を見出してきた。

そこで以上の問題意識に基づき、漢字文化圏古医籍の「定量」的比較研究を構想した。この4国同時比較により自国中心主義が排除され、客観データの軽重に基づく共通点と史的背景が明らかになり、各国の伝統と傾向および研究の論理・意義も相互に認知しうるだろうと考えたからである。

すなわち漢字文化圏各国が自国史観を排して共有できる客観的歴史観を確立し、今後の実りある研究協力の基盤構築に寄与することが本研究の目的である。

## 2 研究対象

本研究では漢字文化圏4国ほかに現存する各国古医籍の書誌データ、および蔵書目録・書誌解題書・関連史料の記載を対象とする。また日本人の著述を和書、中国人の著述を漢籍、韓国人の著述を韓籍、ベトナム人

の著述を越籍と呼ぶ。対象とする古典籍の定義は各国で異なるが、和書は幕末の 1867 年まで、漢籍は清末の 1910 年まで、韓籍は日本統治前の 1909 年まで、越籍はフランス統治前の 1886 年までに成立ないし筆写・刊行された文献を対象とし、それらの復刻書もあれば利用した。

これまで研究代表者は日本・中国(台湾を含む)・韓国・ベトナム、および 4 国古医籍を所蔵するアメリカ・イギリス・フランス・オランダ・ドイツ・イタリア(バチカンを含む)の代表的蔵書機関で調査を重ねてきた。すでに台北故宫博物院[2]・ベトナム国家図書館[3]および李氏朝鮮王朝蔵書のソウル大学奎章閣[4]について全所蔵古医籍の調査を完了し、書誌データの連載報告も終えた。現在は国家図書館[台北]の調査データを連載報告中[5]で、ベトナム最大の古典籍所蔵研究機関の漢喃研究院と、韓国最大の蔵書機関の国家中央図書館も調査を完了し、報告を準備している。さらに今回の研究助成により、台湾第 3 の古典籍蔵書機関である中央研究院傅斯年図書館および韓国第 3 の蔵書機関である精神文化研究院の調査も終了した。これら原本調査で得た書誌データは欧米所在書が 150 件、ベトナム所在書が 433 件、韓国所在書が 728 件で、台湾所在書は調査が不要の故宫『四庫全書』本を除き 784 件におよぶ。

他方、現存古典籍数が最大の日本所在書は、研究代表者が和書の古医籍 860 件まで原本調査を終えた。さらにこれを含めた医薬・博物書 15,070 件について、国文学研究資料館が『国書総目録』『古典籍総合目録』ほかより収集した書誌データベースの利用許可を受け、年表化して連載報告している[6]。調査に種々の制限が多い中国大陸所在書は、研究代表者が 104 件まで原本調査を完了した。またこれを含めた中国所在の古医籍は、共同研究者の所属する中国中医科学院がデータベース化した『全国中医図書聯合目録』より、共同研究者が漢籍医書 12,637 件について書誌データを収集した。以上より同一バージョンの重複データを除く漢字文化圏 4 国歴代の古医籍約 29,000 件について研究を実施したが、これは現存書の 90%前後を網羅すると推測される[7]。なお原本の所在が不詳で散佚の可能性がある書についても、収集したデータや関連史料の記載から推定できる場合は考察に使用した。

### 3 研究方法

本研究では日中韓越 4 国の古医籍書誌データ約 29,000 件を、以下の諸点に注目して定量史学的に解析し、さらに定性的考察も加える。

- ・各国の医書が他国で復刻された回数と復刻時期の集計と解析
- ・自国化を体系づけた各国医書が引用する他国医書の集計と解析

このデータを統合し、以下の考察を行う。

- ・各国の体系形成に他国の医書が果たした役割と共通点
- ・各国の伝統と体系の形成に関与した歴史・地理・社会的要因

なお当報告では主に共通点・共通傾向を考察し、多岐にわたる各国間の相違は概要を記すにとどめ、相互理解に資することにした。

### 4 集計結果

#### 4-1 各国の医書が他国で復刻された回数・時期および解析

##### 4-1-1 中国

1910 年以前の中国で復刻された他国医書は以下の 28 書があったが、中国版越籍はみあたらなかった(カッ

コ内は復刻年)。

#### ①中国版韓籍:3書

- ・金循義ら『針灸日編集』1巻(1447成立):4回(1890、1891、1892、1910。1890は和刻版木による重印)
- ・許浚『東医宝鑑』25巻(1613初版):18回(1763、1763、1766、1796、1796、1797、1821、1831、1831、1847、1885、1885、1889、1890、1908、刊年不詳の明版1種・清版2種。1890と1908は和刻版木による重印)
- ・康命吉『濟衆新編』8巻(1799初版):2回(1817、1851)

以上より、韓籍医書の中国版は清朝後期19世紀以降に集中しており、その一部に明治維新以降に日本から輸出された和刻韓籍の版木が関与していたと分かる。また『東医宝鑑』の復刻回数より、評価の高さも理解される。

#### ②中国版和書:25書

- ・多紀元簡『観聚方要補』10巻(1857再版):3回(刊年不詳清版3種。ともに江戸1857の版木による重印)
- ・多紀元簡『脈学輯要』3巻(1795初版)『救急選方』2巻(1801初版)『医賸』3巻附1巻(1809初版)『金匱玉函要略輯義』6巻(1811初版)『傷寒論輯義』7巻(1822初版)『素問識』8巻(1837初版)・多紀元胤『難経疏証』2巻(1822初版)・多紀元堅『傷寒広要』12巻(1827初版)『傷寒論述義』5巻(1838初版)『薬治通義』12巻(1839初版)『金匱玉函要略述義』3巻(1854初版)・多紀雅忠『医略抄』1巻(1795初版)・『経穴纂要』5巻(1810成立):1回(1884。上記13書の和刻版木を用いて『聿修堂医学叢書』として合印。清末までに数回重印されている)
- ・佐藤正昭『古方通覧』1巻(1799成立):2回(1885、刊年不詳清版1種)
- ・本庄俊篤『眼科錦囊正編』4巻『眼科錦囊続編』2巻(1831・1837初版):2回(1885、刊年不詳清版1種)
- ・橘尚賢『徽瘡証治秘鑑』2巻(1776初版):3回(1885、1895、刊年不詳清版1種)
- ・岸田吟香『花柳弁証要論』1巻:1回(1888、岸田吟香の上海楽善堂が出版)
- ・多紀元堅(松井操漢訳)『診病奇佻』2巻(1843成立)森雲統『五雲子腹診法』1巻:1回(1888、王仁乾が日本で出版)
- ・石神亨(沙曾詒漢訳)『肺病問答』1巻(成立・刊年未詳):2回(1894、1903)
- ・源養徳『脚気類方』1巻(1763初版):1回(1899)
- ・多紀元簡『脈学輯要』3巻(1795初版):2回(1901、1904)
- ・吉益南涯『輯光傷寒論(中国名:刪定傷寒論)』2巻(1822初版):1回(1910)
- ・丁福保が日本の生薬学書から漢訳『化学実験新本草』1冊:1回(1910)

以上の全ては明治維新以降の中国版であり、多くは日本から輸出された和刻版木による重印である。明治政府の西洋医学一本化政策で伝統医学書の出版が無意味になったためであるが、これら中国版には削り落とし忘れた一二点やレ点が多見される。また一部に和文書から新たに漢訳した中国版もあり、明治以降の日本への注目をうかがわせる。

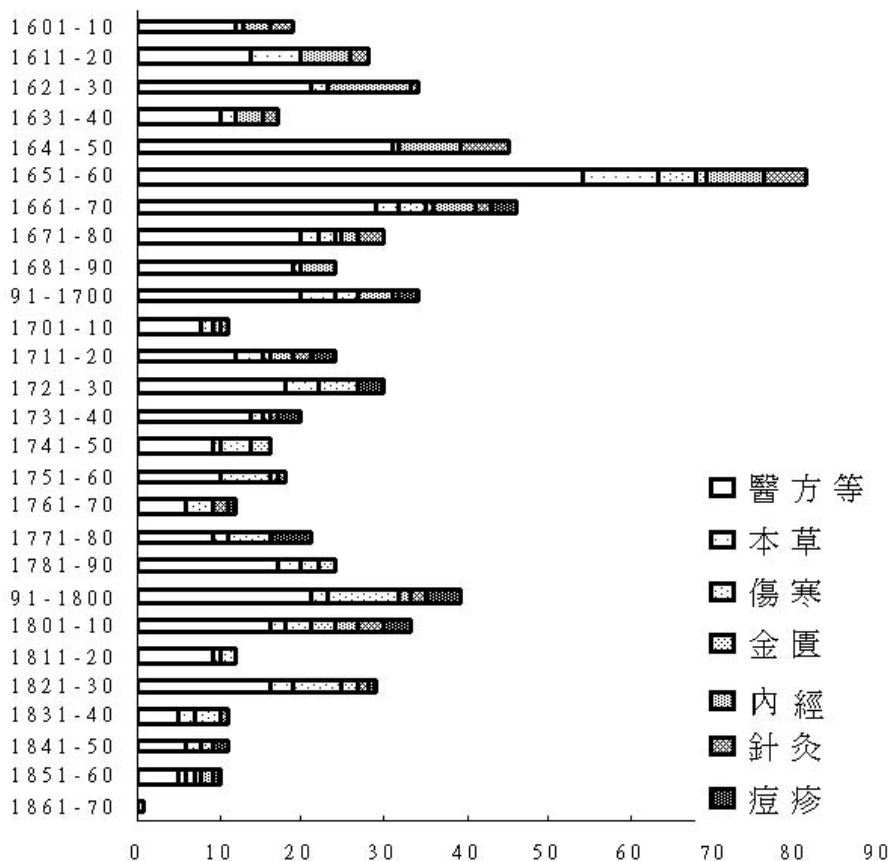
#### 4-1-2 日本

1867年以前の日本で復刻された他国医書は漢籍が多く、これに和刻韓籍が次ぐが、和刻越籍はみあたらない。

#### ③和刻版漢籍:約323書

江戸期以前の日本における医書出版は3書があり、明の熊宗立『(新編名方類証)医書大全』24巻(底本は熊氏種徳堂1467年版)の復刻(1528)が嚆矢、第二も明の熊宗立『俗解八十一難経』7巻(底本は鰲峰熊氏中和堂1472刊本)の復刻(1536)だった。他に宋・施晫『察病指南』3巻が室町中期15世紀頃に復刻されている。

グラフ1 江戸期和刻版漢籍の出版回数[8]



江戸期は商業出版の発達で約320書の漢籍医書が復刻されたが、刊印年不詳書および版本の相違を除くと314書になる[8]。これを分野で大別すると、医方等207、本草25、傷寒27、金匱3、内経14、針灸14、痘疹24だった。また314書の和刻回数は計680で、細目は医方等411、本草53、傷寒70、金匱16、内経60、針灸39、痘疹31である。これより臨床医学書の医方等・針灸・痘疹が復刻の主体だったと分かるが、本草・傷寒・金匱・内経の基礎医学書も一定の割合を占めていたことが分かる。

また和刻回数の刊行年で10年ごとに集計したグラフ1で、江戸期の推移をあらわした。前期の1651-60年をピークに漢籍医書の大流行があり、後期の1791-1800年をピークに小流行のあったこと。前期の大流行は臨床医学書が中心、後期の小流行には基礎医学書の役割が大きかったと分かる。

さらに復刻回数の多い順の10書を、成立年代・巻数と共に挙げると以下のようなになる(カッコ内は江戸前期・中期・後期の回数)。

明『医方大成論』1巻:26回(22・4・0)、明代『万病回春』8巻:19回(16・3・0)、元代『十四経發揮』3巻:17回(7・6・4)、漢代『傷寒論』10巻:15回(1・4・10)、漢代『金匱要略』3巻:14回(2・5・7)、宋代『運氣論奥』3巻:13(11・2・0)、元代『格致余論』1巻:13回(11・2・0)、元代『難経本義』2巻:12回(9・2・1)、明代『医学正伝或問』1巻:10回(8・2・0)、金代『素問玄機原病式』1巻:10回(8・2・0)。

復刻回数が多くよく売れたのは8巻以内のコンパクトな書(『傷寒論』10巻は実際は3巻ほどの文字数)、中国の全時代の書にまたがり、おおむねは江戸前期に流行したが、傷寒・金匱だけは中期から後期に流行の拡大したことが分かる。

④和刻版韓籍:7書

- ・権仲和ら『新編集成牛医方馬医方』2 卷(1399 初版):1 回(江戸前期。底本は 1580 版)
- ・李昌庭『寿養叢書』4 卷(1617 成立):1 回(1669)
- ・崔致雲『新註無冤録』2 卷(1440 初版):1 回(江戸前～中期)
- ・許浚『東医宝鑑』25 卷(1613 初版):3 回(1724、1730、1799。幕命による校訂・復刻)
- ・許任『針灸経験方』3 卷(1644 初版、1 巻本):2 回(1725、1778)
- ・崔致雲『無冤録述』2 卷(1440 初版『新註無冤録』下巻の摘訳):3 回(1768、1799、1854)
- ・金礼蒙ら『医方類聚』266 卷(1477 初版):1 回(1861。幕府医官による校訂・復刻)

韓籍の和刻は漢籍よりはるかに少ないが、江戸の全期にわたって出版されている。分野も獣医・養生・針灸が各 1 書で計 4 回、医学の全科にわたり基礎から臨床までを記す医学全書また法医学書が各 2 書・計 8 回の出版で、各分野がほぼ網羅されている。また 25 巻や 266 巻という大部な出版に幕府が関与しており、高く評価されていたことが分かる。

#### 4-1-3 韓国

##### ⑤韓国版漢籍:94 書

1909 年以前の韓国で復刻された他国医書は漢籍だけで、三木[9]は版本の相違を除いて 92 書を挙げる。これには史書・目録に記録されるのみで散佚の可能性がある書を含むが、カウント漏れが 3 書、我々の検討で誤認と判断された 2 書がある。したがって三木の調査では 93 書まで計上したことになるが、我々はさらに以下の韓国版漢籍 1 書を見出した。

- ・明・張四維『医門秘旨』4 卷:1 回(1576)

韓国の漢籍医書刊行は中国とほぼ前後して早く、高麗時代の 1059 年に始まる。李朝前期には最盛期を迎え、多数の医書で活字出版されたが、そのほぼ全ては中央ないし地方政府の刊行物だった。秀吉による文禄慶長の朝鮮出兵で国力が疲弊して以降、出版も減少するが、19 世紀前後より商業出版も普及してやや増加する。これら韓国版漢籍の多くは 1～3 回の復刻だが、三木の調査に我々の知見も加えて復刻 5 回以上の書を以下に示す。

- ・王惟一『〔新刊補註〕銅人腧穴針灸図経』5 卷(1026 初版):9 回(1431、1543、1553、1578、1585 前、1619 頃、1655、1778 頃、19 世紀)。
- ・李希憲監校『〔新刊補註釈文〕黄帝内経素問』12 卷(1068 初版):6 回(15 世紀後半、16 世紀後半 2 種、1585 前、1615、18 世紀後半)
- ・虞搏『〔新編〕医学正伝』8 卷(1515 成立):6 回(1531-44 間、1564 前、1585 前、1675 前、18 世紀後半、1819)
- ・李梴『〔編註〕医学入門』首 1 巻・7 巻(1575 成立):6 回(1613 頃、17 世紀前半、1675 前、1818、1820、1909)
- ・李東垣ら『東垣十書』(1399-1424 初版)全 10 書:5 回(1488、16 世紀前半、1540 頃、16 世紀後半、1765)

以上の 5 書は 1909 年刊の『医学入門』以外すべて政府刊行物と判断され、国家として重視した書といえる。うち復刻回数第一と第二は基礎医学書で北宋政府の編纂物、第三以下は医学全書ないし叢書で明代民間の編刊物という特徴が目される。

#### 4-1-4 ベトナム

##### ⑥越喃版漢籍:14 書

1886 年以前のベトナムで復刻された他国医書は、それに基づく写本による推定を含めて以下の漢籍 14 書が確認されたが(カッコ内は復刻年)、和書・韓籍の復刻版は見出せなかった。

- ・虞搏『医学正伝』8 卷(1515 成立):最低 1 回(18 世紀?)
- ・万全『万氏婦人科』1 卷(漢籍『万氏女科』3 卷[1549 成立]の抜粋):最低 1 回(19 世紀後半)
- ・薛己著『外科枢要大全』4 卷(1571 成立):最低 1 回(1807)
- ・李梴『(編註)医学入門』首 1 卷・7 卷(1575 成立):最低 2 回(1859 前、1859)
- ・龔廷賢『万病回春』8 卷(1587 成立):最低 1 回(19 世紀)
- ・龔廷賢『(新刊)雲林神彀』4 卷(1591 成立):最低 1 回(19 世紀)
- ・龔廷賢『(医林状元)寿世保元』10 卷(1615 成立):最低 1 回(19 世紀)
- ・江聶久可『活幼心法大全』9 卷(1616 成立):最低 1 回(19 世紀)
- ・翟良『(医海大成)痘科纂要』1 卷(1628 成立):最低 1 回(1844)
- ・吳又可『(醒医六書)瘟疫論』3 卷(1642 成立):最低 2 回(1848、1876)
- ・費啓泰『救偏瑣言』10 卷(1659 成立):最低 1 回(1881)
- ・邵志琳『延齡藥石』1 卷(1714 成立):最低 1 回(1870)
- ・唐千頃『大生要旨』5 卷(1762 初版):最低 1 回(1870)
- ・容山徳軒『(新刊)普濟応驗良方』8 卷(1799 成立):最低 1 回(1875)

以上の越喃版 14 書は、和刻版の約 323 書、韓国版の 94 書よりはるかに少ない。しかしベトナムは高温多湿で書物の伝存が難しい。また各漢籍の成立が早いにもかかわらず、ベトナムの復刻がみな 19 世紀であることも互考すると、本来より早期のベトナム版が相当にあった可能性が高い。それゆえ、いずれの復刻回数も「最低幾回」と判断した。

以上は明代と清代の書のみで、復刻年と近いはずの清代後期の書が 1 点もないことは何かの理由を示唆する。全体の内容は臨床の各科および医学全書にまたがるが、小児科・産婦人科・養生(老人向け)の書が多いこと、明代の医学全書とくに龔廷賢の著述が多いことは注目される。

#### 4-2 自国化を体系づけた各国医書が引用する他国医書および解析

##### 4-2-1 日本の『啓迪集』

日本医学の独自化は平安時代の丹波康頼『医心方』30 卷(984 成立)から顕著に見られるが、それが現在の臨床に使用されている訳ではない。現代は江戸初期に形成された後世方派と、それに対抗し江戸中期に形成された古方派等が昭和以降に融合した臨床が一般に行われている。この後世方医学を提唱した曲直瀬道三(1507-1594)は日本医学中興の祖とされる。自作の姓「曲直瀬」には「東の島国」の意味が推定され、どうも道三は中国とは違う日本の風土を意識していた[10]。彼の代表作『啓迪集』8 卷(1574 成立)は医学の全科にわたる全書で、後の後世方派を方向づけたとされる。ただし基本的に道三の文章はなく、漢籍医書から有用と認めた部分を取捨選択し、その引用文から編纂している。この形式で道三は独自性を形作っており、『医心方』でも同様の作業が行われていた。

『啓迪集』に引用された漢籍医書は王・小曾戸[11]の検討によると 46 書で、各書の引用回数も調査されている。

すなわち明の虞搏『医学正伝』8 卷(1515 成立)からが最多で 462 回、以下は明の劉純『玉機微義』50 卷(1396 成立)404 回、明の王璽『医林(類証)集要』20 卷(1482 成立)271 回、明の楊珣『丹溪心法類聚』2 卷(1507 初版)198 回、明の王永輔『簡効惠濟方』8 卷(1530 頃成立)169 回の順だった。これら上位 5 書の引用だけで全体の過半を占め、道三が『啓迪集』の編纂に影響を受けた程度が分かる。またいずれも明代の編纂であり、『丹溪心法類聚』を除く 4 書は『啓迪集』と同じ医学全書という共通点もあった。

#### 4-2-2 韓国の『東医宝鑑』

韓国医学の独自化は李朝初期 1433 年の勅撰医学全書『郷薬集成方』85 卷の編纂で明瞭となり、これは書名の「郷薬」にも現れている。1477 年刊行の勅撰『医方類聚』266 卷は、唐～明初の医書 153 種以上の引用からなる日中韓越で最大の医学全書だが、歴大さゆえ李朝で 1 回刊行されたただけだった。とりわけ独自化を決定づけ、その高いレベルで現在まで強い影響を及ぼしているのは、許浚(1539-1615)が勅命を受け編纂した医学全書『東医宝鑑』25 卷(1613 初版)である。中国の東に位置する自国の医学を独自化した意識は、書名の「東医」にはっきりと読み取れよう。それゆえ 1909 年以前まで計 6 種の版本[12]があるが、同一版木による重印を加えるなら印行は相当な回数になるだろう。中国では 18 回、日本では 3 回復刻されたが、いずれも重印本を含むために多い。本書は現代も韓医学のバイブルとされ、韓国で医療保険が適用される韓医処方はみな本書を出典とするほどである。

許浚は本書の序文・集例(凡例)に続く「歴代医方」で、編纂に引用した漢代から明代 16 世紀までの漢籍医書 83 書および自国の『医方類聚』『郷薬集成方』『医林撮要』を時代ごとに著者名も列記する。基本的に引用文からなる本文では、この出典が逐一略称で注記されている。中には間接引用と判断される書名や時代の誤認も見られるが、各時代の代表的漢籍の引用回数を本書電子版で試みにカウントすると、以下のようなようだった。

漢『素問』5、漢『傷寒論』5、隋『病源』6、唐『千金方』3、唐『外台秘要』5、宋『直指方』426、元『得効方』1,094、明『丹溪心法』2、明『玉機微義』6、明『医学正伝』557、明『医林集要』39(医林で 34、集要で 5)、明『医学入門』2,842、明『古今医鑑』674、明『万病回春』535

以上で引用回数の多い数字には少々の数え間違いがあろうが、全体傾向は反映しているだろう。これで明らかなのは、漢～隋の古典的基礎医学書および唐代医学全書からの引用が極端に少ないこと。宋代以降の医方書や全書からの引用が多いこと。その回数より、およそ『医学入門』>『得効方』>『古今医鑑』>『医学正伝』>『万病回春』>『直指方』の順で重視されること。とりわけ 3,000 回近い『医学入門』の引用は最大で、同じ龔廷賢編纂の『古今医鑑』『万病回春』、ほかに『医学正伝』が上位にあり、ともに明代の全書であること。しかし明代全書でも『玉機微義』や『医林集要』の引用は多くないこと、などが注目される。

#### 4-2-3 ベトナムの『医宗心領』

ベトナムは中国の南に位置し、漢字の発音は中国系音韻を借用するが、文法はオーストロアジア語系で異なる。そのためベトナム固有漢字の「字喃」を平仮名のように漢字に併用し、ベトナム文を記す。この理由でベトナムの自国医書には南薬や国訳を書名に冠することが多い。その早い例は 15 世紀初期とされる洪義(または慧静)の『南薬神効』で、中国の北薬に対するベトナム自生の南薬で治療する効果を謳う[13]。

前述の越喃版漢籍もそうだが、越籍でも 18 世紀をさかのぼる原本の現存は少ない。また近世以降の中国を代表とする出版文化は一部のみで、多くの書物は写本ないし抜抄本の形式で作成・伝承されてきた。このため

ベトナム医学の伝統を体系的に示す文献は多くない。唯一とっていい書は黎有卓(号を海上懶翁、1720-1791)の医学全書『海上懶翁医宗心領』65(ないし 66)巻で、ここにベトナム化した南医薬学が集大成されている。懶翁はベトナム史上最大の医人とされ、いまハノイには彼の名を冠した医廟と通りもある。

本書は懶翁が幾段階にも分けて著述した年代の異なる序文があり、現存する版本も幾段階にも分けて徐々に刊行された刊記がある。それらからすると1770-80年にかけて著述され、自筆原稿に基づき1880-85年にかけて刊行されたことになる。内容は主に漢籍の引用からなるが、懶翁自身の文章も少なくない。引用文献は各巻凡例に著者名も含めて記載され、ままた文中にもある。それらを補足して以下に列記する。

王太僕(注)『素問』、仲景(『傷寒・金匱』)、巢氏(『病源』)、東垣・丹溪(『東垣十書』)、『簡易(方)』、『医学入門』、『古今医鑑』、『寿世保元』、『薛氏医案』、『医貫』、『錦囊(秘録)』、『景岳全書』、『(証治)準繩』、『(李)士材(医書)』、『頤生(微論)』、『救偏瑣言』、『万氏家蔵』、『婦人良方』、『濟陰綱目』、『産宝』、『保産(機要)』、『錢仲陽(小兒藥証直訣)』、『保赤全書』、『痘疹心法』、『痘疹金鏡録』、『雷公炮炙論』、『本草綱目』

これらは漢代から清代中期までの書で、ほぼ全分野にわたっているが、産婦人科・小児科書および本草書が多い。また本草を除いて基礎医学書が少なく、明代中期から清代前期の医学全書が多い。全体では『医学入門』の引用が目立ち、本書の巻14「外感通治集」では『医学入門』を5年間読んだと記す。次いで多く挙げられるのは張介賓『景岳全書』64巻(1624-40)の引用文だった。文中には「経験」「南薬」など自国を強調する部分、またベトナムに傷寒病はないので麻黄・桂枝による強い発汗治療は不可、と記す部分も注目された。

## 5 考察

### 5-1 各国の体系形成に他国の医書が果たした役割と共通点

中国では韓籍・和書の医書が復刻され、当然ながら利用されていた。しかし、いずれも清朝後期以降のことであり、漢籍医書全体の12,637件からすると中国医学体系への影響は、清末までは大きくなかったといえる。ただし韓籍『東医宝鑑』の復刻回数は本国を越えており、高く評価されていた。また明治維新後に版木や原本が輸出されて中国に紹介された和書は、多くが幕府医官の高度な研究書だったため、のち現代中医学の形成に少なからず寄与している[14][15]。

日本では江戸前期を中心とした漢籍医書出版ブームで314書が計680回も和刻されており、当然ながら強い影響があった。また臨床医書が主であったが、江戸後期には基礎医学書の小さなブームも起きていた。他方、日本医学を方向付けた『啓迪集』では明代医学全書の『医学正伝』『玉機微義』『医林集要』への傾倒が明瞭で、同じ明医学全書の『万病回春』は18回も復刻されていた。

韓国では中国と前後する早さで漢籍が出版され、李朝末期までに94書の復刻が確認された。これは現存する韓籍医書約300書から判断しても大きな数で、影響は大きかったといえる。5回以上復刻された韓籍は政府刊行が大多数で、国家的政策の一環だった。政府勅撰書として韓医学体系を構築した『東医宝鑑』では『医学入門』『古今医鑑』『万病回春』『医学正伝』の引用が多く、とりわけ『医学入門』が重視されていた。『医学入門』が6回も刊行されていたことと関連するだろう。

ベトナムでは漢籍の復刻が14書まで確認および推定されたが、実数はもっと多かっただろう。全体的に臨床医学書が多いが、『医学入門』以外に龔廷賢の『万病回春』『雲林神穀』『寿世保元』が揃って復刻されていたことが注目された。さらにベトナム医学を大系化した『医宗心領』でも、『医学入門』を筆頭に龔廷賢の『古今医鑑』



『寿世保元』が引用されていた。

表 1 明代医学全書の各国版数

| 明代医学全書(成立年)      | 中国明版 | 和刻版 | 韓国版 | 越喃版 |
|------------------|------|-----|-----|-----|
| 玉機微義 (1396)      | 8    | 5   | 1   | 0   |
| 東垣十書 (1399-1424) | 7    | 5   | 5   | 0   |
| 医林類証集要 (1482)    | 4    | 2   | 1   | 0   |
| 医学正伝 (1515)      | 8    | 16  | 6   | 1   |
| 医学入門 (1575)      | 5    | 9   | 6   | 2   |
| 万病回春 (1587)      | 7    | 19  | 4   | 1   |
| 雲林神殻 (1591)      | 4    | 4   | 0   | 1   |
| 寿世保元 (1615)      | 1    | 1   | 0   | 1   |

これら日韓越の自国化では、各々を体系づけたのが各一人の医家による医学全書である点、それに多く引用されたのも各々一人の医家による明代の医学全書である点、また自国を強調する意識も共通している。とりわけ 1575 年の李梴『医学入門』8巻は韓越の2書で一致して筆頭、1515 年の虞搏『医学正伝』8巻は日本で筆頭、韓国で4番目の引用で、両書は各国医学自国化のモデルとされていた可能性も推測された。また 16 世紀

の『啓迪集』では時期的相違で利用されなかったが、16 世紀末から 17 世紀初の『万病回春』『雲林神殻』『寿世保元』も引用や復刻が共通して認められた。そこで表1に明代医学全書の各国版数を示すが、これらが本国明代と同様かそれ以上に日本・韓国で受容されていた様子が分かる。あるいはベトナムも同様だった可能性もあろう。日韓越の医学は、きわめて近い意識で独自化を進めたのである。

## 5-2 各国の伝統と体系の形成に関与した歴史・地理・社会的要因

上の考察にもかかわらず、現在の日韓越医学には相当の懸隔がある。それは第一に各国が固有に自国化した結果といえる。第二には韓国が『東医宝鑑』、ベトナムが『医宗心領』に基づく医療を今なお行っているのに対し、現在の日本では『啓迪集』の価値が消失したからである。前述した古方派の台頭とその後の融合で、さらに日本は独自化を進行させた。江戸後期にあった基礎医学を中心とした中国医学古典のミニ流行が示すように、中国周縁国では日本だけが中国をも越えて古典医学への傾倒が顕著に進んでいったのである。そのデータを示す紙幅はないが、結論として以下の日本特有の要因が考えられた。

第一は地理的要因で、唯一の島国ゆえ中国との往来が困難なため、難解な医学古典も独力で研究したこと。第二は史的要因で、中国との紛争が唯一なかったため、中国文化の根源まで親近感やあこがれを持ち続けたこと。第三は社会的要因で、科挙制度を唯一採用しなかったゆえ、学問のある医師・僧侶と儒者は士農工商制度をすり抜けて高い社会地位を得られたため、古典医学が儒学・仏典同様に研究されたこと。第四は経済的要因で、江戸期の貨幣経済の発達により都市を中心に出版文化が盛行し、古典や研究書の普及が一層の研究を促したこと。これら要因が複合的に作用したことで、古典医学研究を契機に江戸中期からさらに独自の医学を形成していったといえる。

## 6 まとめ

漢字文化圏の古医籍を定量化して比較研究することで、各国が他国の医学を選択的に受容し、さらに自国化を進めた歴史背景を提示した。これは各医学相互の関係史でもある。同時に各国が一定の共通性を以て独自性を獲得してゆく従来まったく知られていない歴史現象も浮かび上がってきた。本調査研究の結果は、客観的

な文献書誌データに基づくゆえ十分な説得力があり、各国の伝統医療担当者や政策者が自国史観を排して共有可能である。当成果は別の機会でも発信につとめ、今後の実りある研究協力の基盤構築に寄与したい。

なお本研究でキーワードとなった明代医学全書が、なぜ各国医学の独自化に影響を与えたのか、また各国ではさらに如何なる独自化が進行していったのかも、今後はより詳細に検討すべきと思われる。

**謝辞:**本研究は JFE21 世紀財団の研究助成による。これを記して深甚の謝意を申し上げたい。

## 文献および注

- [1] 真柳誠「経穴部位標準化の歴史的意義」、第二次日本経穴委員会編『WHO/WPRO 標準経穴部位公式版 発刊記念講演会要旨集』11 頁、2008 年 5 月
- [2] 真柳誠「台湾訪書志 I 故宮博物院所蔵の医薬古典籍(1)-(37)」『漢方の臨床』49 巻 1 号(2002 年 1 月)-同 54 巻 2 号(2007 年 2 月)
- [3] 真柳誠「ベトナム國家圖書館の古醫籍書誌」『茨城大学人文学部紀要・人文学科論集』45 号 1-16 頁(2006 年 3 月)
- [4] 真柳誠「ソウル大學奎章閣の古醫籍書誌(一)~(四)」『茨城大学人文学部紀要・人文学科論集』41 号(2004 年 3 月)-同 44 号(2005 年 9 月)
- [5] 真柳誠「臺灣訪書志 II 國家圖書館〔臺北〕所蔵の醫藥古典籍(1)-(21)」『漢方の臨床』54 巻 4 号(2007 年 4 月)-同 56 巻 1 号(2009 年 1 月)
- [6] 真柳誠「日本の医薬・博物著述年表(1)-(4)」『茨城大学人文学部紀要 人文コミュニケーション学科論集』1 号(2006 年 9 月)-同 5 号(2008 年 9 月)
- [7] 現存数が最大の日本人著述および第 2 の中国人著述は台湾蔵書を含め 90%以上、現存数が少なく網羅性もやや低い韓国人とベトナム人の著述は 70%近くのデータを得ただろうと各種目録から考えられる。これより 90%前後の割合を推測した。
- [8] 真柳誠「江戸期渡来の中国医書とその和刻」、山田慶兒・栗山茂久『歴史の中の病と医学』301-340 頁、京都・思文閣出版(1997 年 3 月)
- [9] 三木栄『朝鮮医書誌』187-292 頁、大阪・三木栄私家版(1956 年)
- [10] 真柳誠・矢数道明『『曲直瀬』姓の由来』『日本東洋医学雑誌』42 巻 1 号 93 頁(1991 年 6 月)
- [11] 王鉄策・小曾戸洋「所従証経籍解説」、矢数道明ら『現代語訳 啓迪集』787-795 頁、京都・思文閣出版(1995 年 6 月)
- [12] 三木栄『朝鮮医書誌』110-116 頁、大阪・三木栄私家版(1956 年)
- [13] P.ユアール・M.ウオン(高橋暁正ら訳)『中国の医学』ベトナム医学 115-124 頁、東京・平凡社(1972 年)
- [14] 真柳誠「近代中国伝統医学と日本—民国時代における日本医書の影響」『漢方の臨床』46 巻 12 号 1928-44 頁(1999 年 12 月)
- [15] 真柳誠「現代中医鍼灸学の形成に与えた日本の貢献」『全日本鍼灸学会雑誌』56 巻 4 号 605-615 頁(2006 年 8 月)